
ライダー数人が幻想入り

7 5 3 は 3 1 5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライダー数人が幻想入り

【Nコード】

N5247P

【作者名】

753は315

【あらすじ】

私の好きなライダーを幻想入りさせてみようという作品です。

注意・処女作ですので過度な期待はしないでください

- ・ライダー以外にも幻想入りさせるかも・・・
- ・東方はほぼ、初心者と思ってください
- ・753は315です、どうか弟子にしてください、僕、なんでもしますから

・ところどころにいろんなネタを出します、（オンドウル等）

そういった類の者が苦手な方は、「戻る」や「飛ばして読む」をしてください

・東方projectと平成ライダーのコラボです、そういうのが苦手な方は「戻る」を推奨します

第1波ライダー幻想入り（続）（前書き）

自分の文章力の無さに飽きれる、だが私は謝らない。

戦闘シーンあります十この章からオリキャラ入ります、本当にすいません。

第1波ライダー幻想入り（続）

ここは草原、木はほとんど無いが、緑が生い茂り、動物達が生き生きと過ごせる美しい場所

普段ならそうだったはずなのに

ここは戦場、木も緑も動物もない。ここにあるのは、土、バイク、ステンドグラスのような
欠片、灰、割れたベルト。

・・・この世界に人間はもうほとんどいない。いるのは1万の同じ姿をしたライダー、名前は「ライオトルーパー」というらしい。それとライオトルーパーの味方をしている怪人達。

元々ライオトルーパーは「オルフェノク」という怪人しかかない。人間の味方をするオルフェノクもいる、「木場勇次」が特に有名だが、そういったオルフェノクは追放されていた。

そして、追放されたオルフェノクやファンガイア、ほかにも数体の怪人とともに「仮面ライダー」達が戦っていた。とうとう逃げ道を失った人間達はもう500人と残っていなかった。そうして、追い込まれた人間とライダーは悪あがきとも取れるような抵抗をしていたのであった。

名護

「くっ、なんてパワーだ!!」

この男、名護啓介もライダー、仮面ライダーイクサである。
そして、その目の前には・・・

???

「どうしたの？もつと僕を笑顔にしてよ？」

この男は他の怪人とは格段に違う。笑顔、というより狂気に近い、いや、それ以上の何か・・・

この「ダグバ」と呼ばれるものは他を圧倒していた。戦闘力も、ライダーを半殺しにするところも、恐怖を植えつけるのも。

今、自分がこの男に攻撃を受けている。他のライダーの大半はこの男にやられてしまった・・・

いや、「この男」というのは語弊がある、「狂気に満たされた男達」のほうがしっくり来る。

ダグバ

「もう終わったの？」

ドラゴンオルフェノク

「うん、終わったよ、久しぶりに楽しめたかな？」

この2人は他を圧倒していた・・・周りに立っているライダーは居なかった。

ドラゴンオルフェノク

「そんなことより良かったの？あの蝙蝠くんに力を与えちゃって。たしか『ダグバの力』だっけ？僕もほしいな・・・」

ダグバ

「無理だよ、あの力は僕達にしか使えないものだから・・・。あ

れに力を貸したのはその方が楽しそうだから」

名護を見下ろしそんな話をしている。

ダグバ

「そろそろ帰ろう、ここも飽きちゃった。」

ドラゴンオルフェノク

「今度は君と戦いたいな・・・」

ダグバ

「・・・待ってるよ」

彼らが去ったあと、名護を含む数人のライダーはいなかった・・・

~~~~回想終了~~~~

名護

「この手紙にはこのとき私を拾ったと書いてあるな。」

魔理沙

「ふーん、じゃあ他にもライダーがここに来てるんじゃないか？」

名護

「ああ、おそらくそうだろう・・・」

手紙を数度読んだ名護と魔理沙は現在人里へと向かっている。

理由は3つ。まずこの男の食料を買わなければならない、そして手紙には名護を助けるように書いてあった。

そして、この手紙の差出人、『八雲 紫』に今回のことについて

聞き出すのだ。

日ごろ怠けている彼女がここまで一生懸命に（たかが手紙を書いただけ）なった理由も聞き出さないといけない、非常事態ならなおさらだ。

## 霧の湖

チルノ

「あたいこんなじよめないわよ!!」

剣崎

「ウエ!?!・・・なんだよ読めるじゃんか?」

チルノが?であることに苦戦していた剣崎は、あの手紙を渡せばいいんじゃないかと思ひ渡してみた（内容はほぼ名護と同じ）のだから・・・

睦月

「剣崎さん、その子まだ10もいってないんじゃない?」

なるほど、納得だと剣崎。結局全部説明した頃にはすっかり辺りは暗くなっていた・・・。

結局、剣崎一行は湖のチルノの家に泊まることにしたのだが。

剣崎

「ウエ? 紅い館?」

キバット

「ああ、あそこから同族の気配が感じられるからな。とりあえず行ってくる」

どうやら渡とキバットは紅魔館に向かうようだ。

チルノ



「はやくあたいのいえにいくぞ（ていうかいえあったんだ）」  
と急かすいつの間にか近くにいた大妖精は

大妖精

「（そういう体で行こうってあっちの紙に書いてるよ）」

睦月

「（そういうのは喋っちゃだめだよ）」

橘

「（ナニイテンダ、ウジャケルナ）」

作者

「それ以上メタ発言すんな!!」

剣崎

「オバエナニヤツテンダ!？」

きつと翔太郎がいればメタルメモリを押すであろう・・・

~~~~紅魔館某所~~~~

レミリア

「・・・咲夜、昨日の怪物はどこに行ったの?」

とカリスマ感漂う様子で従者のメイドに聞く吸血鬼はレミリアで
ある

咲夜

「分かりません、フラン様も攻撃を受けたあとから姿はみてない
ようです・・・」

そうメイドの咲夜は答えた

レミリア

「そう・・・あなたたちは何か見つけたかしら? 太牙にビショツ
プ?」

レミリアがそう聞いた瞬間、二人の男が現れた

太牙

「いや、まだ見つけていない」

この男こそ、自分の愛する弟のために、他の怪人を裏切って人間を守るために戦い敗れてしまった若きファンガイアの王である。

ビショップ

「こちらはまだ発見できていません、強いて言うなら偶然、キングの弟様がこちらに向かわれるという話が聞こえたくらいです・・・」

この男はファンガイアのチェックメイトフォーと呼ばれる幹部級に所属する男であり、知性派なのに戦闘も強いファンガイアである。因みにレミリアとビショップは300年ほど前に知り合った仲であり、偶然紅魔館の庭に倒れていた2人を助けたのも友人とその上司をもてなすためである。

レミリア

「あら、太牙の自慢の弟の登場かしら。楽しみね・・・」

太牙

「ああ、そうだな。つい3日ほど前に離れ離れになってしまったからな。無事とは思っていたが・・・良かった。」

ふふ、と笑いかけるレミリア。この2人も『ファンガイアの王』『吸血鬼の王女』という接点から妙に馬が合っていたのである。

レミリア

「そうそう、咲夜。フランはまたあの男と地下室？」

咲夜

「ええ・・・しかし何者なんです、あの男？」

実は数日前、奇妙な事件が起こった。フランにある男を餌に出したのだ。もちろんフランはその男の血を吸おうとしたとき、その男が動き出したのだ。そう、いきなり。

もちろん出された食事は死体寸前の物だった、見た目で重症と分かっていた。もちろん腹部にベルト状のものもないし、青い炎も出ていない、血の色が緑でもないし、妖怪ですらない……。

その正体はレミリアも咲夜も、太牙もビショップも知らないし。本人すら知らなかった……。

フラン

「ねえ、あなたは人間なんだよね？」

男

「うん……何者なんだろうな、俺……」

ここは地下室、最近ではフランの部屋はレミリアの部屋の近くにも設けられたが、皮肉なことに、フラン自体ここは懐かしくて気が休まるそうだし、誰にも聞かれない話をするにはちょうど良かった。

フラン

「ご、ごめん。とにかく元気出してよ？ そうしないと前に進めないよ？」

フランはこの男の事が気かりだった。最初はただの餌だと思っていたらいきなり傷が回復しはじめた、そして起こしてみると「ここはどこ？ 俺は誰？」と古いネタを真剣な表情で話され、挙句の果てに目の前で落ち込まれたら気がかりになるのも当然だろう。

いや、本当は興味深いのかもしれない。最近は気が触れることも無く、毎日を充実して過ごしていたにも関わらず、人里の大人の一部や臆病な妖怪は、彼女を見た瞬間に気味悪がったものだ。それなのにこの男は、伸びた爪、尖った牙をみても全く恐れたりしなかったのだ。

それに……2日ほど前、急に襲ってきた蝙蝠の化け物を、こんなウジウジした奴が撃退したのだ。

男

(あの時の光はいつたい・・・)

2日前、地下室でフランにこの世界について説明を受けているとき。急に蝙蝠の怪人が襲いかかってきた、それを目に入れた瞬間。いきなり腹部から光と痛みが感じられた。

そして光が収まると、怪人は姿を消していた。そして……

男

「これはいつたい何なんだ？」

男の手には、オリハルコンプラチナによって加工された弾丸とマガジン、そして、オートマチック（拳銃）があった

・ ・ ・ ・ ・ あの時、男は居るだろうか、
いけば ・ ・

ゴオマ

「ガボドビンゴドボ、ギセタボソキデジヤス。．．ゴセビギデ
ロナルタキンジャヅ、ダダダゲシギザベボソゲ？バレデジヤバスボ
バ？ギサギサグスゼ、リバボソギヒキデジヤス。．．」

第1波ライダー幻想入り（続）（後書き）

ああもう疲れた、データ消えるとかありえんぜ・・・

それでは、作者とゲストの解説コーナー。いやあ、やってみたかったんだよなあ。こういうの

咲夜「お嬢様最高！お嬢様最高！うっ☆うっ☆」

朔也「コレクutteモイイカナ？」

ゴオマ「ギジャバビゴギングスジャツザ」

貴様ら落ち着け、ああああああ、おぜう様の寝顔写真もってくな、俺の晩飯の辛味噌パスタ食うな、グロンギくんなああああああああああ！！

咲夜「ああ、鼻から忠誠心が・・・」

朔也「生まれ変わるほどつよくなれる、辛味噌！！辛味噌！！」

ゴオマ「世話になったな、帰る！！」

くたばれ貴様ら・・・

今回の最初の部分、ですが、世界観的には555のパラロスのようなものとお考えください。ちなみに電王と龍騎はこのときにもこれからも出しません。私の好きな手塚、ライアは出すかもしれませんが、まあ出る確率30%変身する確率5%以下ですが・・・。

あと、名前だけ出した木場、きみは邪魔だった、分かるか？俺の思いどおりにならないものは邪魔なんだよ！！

朔也「ナニイテンダ、ウジャケンナ」

咲夜「早く解説を続けなさい」

へいへい、因みに全ライダー世界とは基本的にパラレル、原作と映画のようなものです、Wはちがうけど・・・

朔也「この手紙はどう説明するんだ？」

ああ、これは本編にも書いたとおり、内容はこの世界にどうやって来たかの説明、因みに現時点で他数人も幻想入りしてます。

咲夜「そんなことより、お嬢様とビショップが友人って設定はぶっちゃけどうでもいいとして、お嬢様はファンガイアの存在は知っていたのですか？」

まあ一応ライダーも東方も原作のパラレルって設定だからいいですよ？

それからフランはレミリアに、怪物は勝手に逃げていったと説明しています。これはきちんと説明した場合、男がレミリアに血を吸われかねないため。

唯でさえ興味を持っているというのに、そんなことを言ってしまうえば吸血されちゃいます、とられる血の量はおいというて、現時点、フランは男のことを友人と認めてますので・・・リア充死ね。

朔也「それで、このオリキャラは変身しそうだな。しかも銃ライダー・・・」

始「おれはウジュウジュしたやつはきらいだからな」

知るか、ロリコン帰れwww

まあ、彼は変身します。この作品の主人公かどうかは置いて、変身します。

ちなみにオリハルコンプラチナは、ブレイド、ギャレンの装甲で、150t以上の衝撃にも耐えるとか耐えないとか。

ついでに銃機種はチェコ製、「CZ-75」です。この銃の詳細情報（この作品において）はまたいずれ紹介したいと思います。

咲夜「最後のあの部分・・・何？」

ふふふ、仮面ライダークウガ放送当時、グロング語でネタバレをしていたのさ！！

朔也「ならこれもそういう情報か!？」

純一「いい推理だ、感動的だな。だが無意味だ!!」

ほんと、ゴオマ君はどうでもいいことしか喋ってません。たぶん文

章無茶苦茶（笑）だが私は謝らない。めんどくさがって、誰も訳さないと信じているからだ。

てかこの小説読んでくださる方が居るのかも不安だぜ！！

では、また次回

始「オレハクサムヲムツコロス！！」

草加「お前、死にたいんだってなあ。望みどろりにしてやる！！」

純一「どうした？変死☆しないのか？」

やつやめ、アッーーーーー

咲夜「ではまた次回をお楽しみに」

朔也「次回も見えてくれないと、俺の精神はボロボロだーーーー」

第1波ライダー幻想入り（前書き）

すいません、こちらが前章です、ごめんなさい。

第1波ライダー幻想入り

ある日、どこかの森の中。男は目を覚ました。

男「・・・おかしい、昨日はめぐみんと食事をしたあと家に帰って寝たはずだ、こんな森の中ではなかったはずなんだが・・・。」

この冷静な男、名前は「名護」という。ちなみにめぐみんとは名護の恋人である。

名護「この辺りはキノコばかりだな。それより。うーん、いい天気だ、今日は特別気分がいい!!」

と1人で伸びをしていると。

女「何言ってるんだ、お前？」

名護「な、なんだ君は？」

髪の毛以外白黒の魔法使い風の少女がツツコミをいれてきた。あわてて誰かと問う名護に対し

魔理沙「私は普通の魔法使いの霧雨魔理沙だぜ。んでここが魔法の森って言う危ないところだからな、とりあえず安全なところにくぞ。ところでお前の名前は？」

と親切に場所の説明までしてくれ、名護をつかみ、名前を聞き移動しようと試みるが・・・

名護「離せ！俺は名護だぞ！うわー！」

と暴れる名護であった。

~~~~~ボタンむしり少女移動中~~~~~

霧の湖のほとり

湖と呼ばれるところに2人の男が居た。

男「剣崎さん、ここどこかわかりますか？」

どうやら迷子になってしまったようである男は剣崎と呼ばれる男に現状の説明を求める。

剣崎「渡君とおなじで湖ってことしか分からないな・・・」  
がしかし、剣崎もここがどこかは分からないようであり、ネガティブなオーラが漂っていた。

渡「ですよね・・・僕たち、帰れるんでしょうか？」  
渡までネガティブな雰囲気になろうとしたとき・・・

謎の男「ケンザキ、人を連れてきたんだが話を通じん、手を貸してくれ」

謎の男が剣崎に助けを求めてきた。

剣崎「ウエ！？人いたんですか橘さんに睦月？」

橘「ああ、チルノと言うらしいのだが・・・」

橘の隣で少女と男が何かを言い合っている・・・

チルノ「あたいのほうがあんたなんかよりさいきょうなんだから！！！」

睦月「俺が、最強だー！！！」

ケンザキ「オバエナニヤッテンダ！？」

橘「コレクツテモイイカナ？」

ケンザキ「ホントニウマインデスカ！？」

ボケをかます余裕のある方々であった・・・

渡「・・・キバット？どうしたのさっきから黙って？」

キバット「いや、俺達とはまた違う吸血鬼の気配が・・・」

そう言って紅い館を睨む蝙蝠がいる傍らで・・・

### 魔理沙の家

結局おとなしく魔理沙の家についていく名護であったが

名護「凄い散らかりようだな、この家は・・・」

魔理沙「・・・悪かったな・・・」

と魔理沙をしかるのであった。

名護「私も手伝うから早くかたづけなさい」

そう言いながら片付けを始める名護をよそに

魔理沙「へいへい・・・そんなことより啓介はなんであんなところに居たんのだ？」

と聞いてきた。

名護「分からないが、きっと全部、あの乾ってやつの仕業なんだろう・・・」

魔理沙「???」

名護「実はあんなことがあってな・・・」

ボタンむしり回想中

## 第1波ライダー幻想入り（後書き）

続きます。いま学校が冬休みに突入してるので、明日にも投稿します。

きっと亀更新になるかもしれませんが、どうか暖かい目で見守ってやってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5247p/>

---

ライダー数人が幻想入り

2010年12月25日20時26分発行